

提 言

縮小しながら発展する地域の創生 （「JA共済総研セミナー」のテーマに寄せて）

一般社団法人 JA共済総合研究所
専務理事

つか 塚 たに 谷 はる 治 し 次



平成27年度のJA共済総研セミナーを平成28年3月11日に開催した。

今回のセミナーのテーマは「縮小しながら発展する地域の創生～新たなコミュニティ創

りを目指して～」とし、広井良典氏（千葉大学 法政経学部 教授）と西村周三氏（国立社会保障・人口問題研究所 名誉所長）の講演、その後に中沢新一氏（明治大学 特任教授 同大学・野生の科学研究所 所長）に加わっていただき、公開討論を行った。

テーマそれ自体の関心、また参加いただく3人の先生方の顔ぶれを見ると、どのような興味深いそして有益な議論がなされるか、本当に興味と期待が大きかったが、当日は160名を超える参加者を得て、公開討論においても一般参加者から多くの質問と意見が出され、盛況のうちにセミナーを終えることができた。

当日のセミナーの詳細は、今後特集号という形で公表していく予定なので、そこでお読

平成27年度JA共済総研セミナーの様相（JA共済ビル・カンファレンスホール）



パネリスト：中沢新一氏（壇上左から2人目）、西村周三氏（同・中央）、広井良典氏（同・右から2人目）

提 言

みいただくこととして、この一文では今回のセミナーの開催に至った経緯やねらいなどにふれたい。

J A 共済総研セミナーは今回の開催で16回目を数えるが、これまでに農業問題、共済・保険、医療・ケア・福祉など、当研究所の調査・研究分野に関する幅広いテーマを取り上げ、外部有識者の講演を主体に開催してきた。

今回のセミナーは、地域社会づくり、地域再生というテーマにおいて過去2回のセミナー（平成25、26年度）と連続性を持つものである。企画サイドとしては、総まとめ的なものとして位置付けていた。本稿では、まずそれら一連の経過を締めくくる意味で、改めて過去2回のセミナーを振り返り、その後、今回のセミナーに期待したことなどを記述する。

当研究所では、地域住民どうしの相互扶助を駆動させる新たな要素として「食」「自然エネルギー」「ケア」に注目し、平成24年に、これらを地域再生につなげるための理論を実証するプロジェクトを立ち上げた。そしてこの取組みの一環として、平成25年度のセミナー（平成26年3月に実施）について、「自然と人間の協働による持続的な地域社会づくり～食・自然エネルギー・ケアでつながる新たな生活基盤の可能性を探る」をテーマとし企画した。

セミナーの前半では「食」「自然エネルギー」「ケア」の各分野において地域コミュニ

ティづくりに精力的に取り組まれている3名の実践者、愛知県厚生連足助病院・早川富博院長、愛知東農業協同組合・河合勝正組合長、東京農業大学農山村支援センター・澁澤寿一先生に事例報告をしていただいた。後半は、今回のセミナーでもパネリストとして参加をいただいた中沢新一先生が加わり、前半の個別報告を踏まえ、永続的な地域コミュニティづくりの条件や協同組合の存在意義などについて幅広い議論が行われた。その詳細は、「セミナー特集号」としてまとめられているが、その特集号の刊行にあたっての一文に、このセミナー開催の発端、4名の先生方がこのセミナーに一堂に会することになった経緯が書かれている。3回のセミナーにつながる重要なところなので、少し長くなるが引用する。

「ことの発端は、2011（平成23）年、愛知県三河山間地域の健康創造をテーマに開催された「香嵐溪^{こうらんけい}シンポジウム」でした。同シンポジウムは、足助病院の早川院長をはじめとする地元の有志たちが、この地域の全住民に参加を呼びかけて実現した企画で、2011（平成23）年の第1回目と翌年の第2回目が足助交流館という豊田市の施設を利用して開催されました。その際、当研究所研究員（川井）が司会進行役をお引き受けしたのがご縁で交流が始まりました。同シンポジウムの第1回目のテーマは『三河中山間の地域力を考える～十年後の地域をみんなで想像しよう～』。そのときの基調講演者が澁澤先生でした。続

く第2回目のテーマは『三河中山間地域高齢者の生活と健康』。このとき、早川院長、河合組合長と中沢先生による鼎談が実現しています」。

そして4名の先生方は、当研究所にとって、研究プロジェクトの共同研究者というよりはむしろ、地域再生という「同じ志を持った仲間」という感覚に近い存在であり、当日のディスカッション会場は、「サロン」的な雰囲気にも包まれていた。

平成26年度のセミナー（平成27年3月に実施）は、前年のセミナーを受け、「ケア」の問題についてさらに多角的かつ専門的な視座からの検証を行うことに主眼をおき、「2025年の日本を俯瞰した調和的な社会経済モデルを探る～これからの10年、地域の高齢化問題にいかに向き合っていくか～」をテーマとした。

セミナー前半では、国立社会保障・人口問題研究所名誉所長で、年金シニアプラン総合研究機構理事長の西村周三先生から「2025年、経済の活性化と高齢化の両立は可能か」、続いて東京大学高齢社会総合研究機構特任教授の辻哲夫先生からは「地域包括ケアシステムを先取りした街づくり～千葉県『柏プロジェクト』の在宅医療・介護モデル～」のテーマで講演をいただいた。後半は、前年度のセミナーで報告をいただいた愛知県厚生連足助病院・早川富博院長にも加わっていただき、多摩大学医療・介護ソリューション研究所教

授の真野俊樹先生の司会により、中山間地域医療機関を拠点とした地域コミュニティ再生構想や高齢化が進む中での人々の価値観・生活スタイルの転換の必要性などについて活発な討論が行われた。「高齢者が元気に生きていくためには75歳まで働くという大パラダイム転換が急がれている」、「地域コミュニティのまとめ役として行政の力量が問われる」など、先生方の様々の意見は明快であり、また新鮮で、参加者にとって非常に印象に残る討論会となった。

このような過去2回のセミナーの流れを引き継ぎ、平成27年度のセミナーが開催された。西村先生、中沢先生には2回目の登場を願うこととなったが、これは企画としての連続性、そして地域再生に「同じ志を持った仲間」が集い、語り合う場というコンセプトを意識してのことである。

J A 共済総研セミナーがテーマとして掲げてきた地域社会づくり、地域再生の取組みは、今や「地方創生」という国家プロジェクトに象徴されるように、この国にとって喫緊の課題であることに疑問を持つ者はいないだろう。様々なレベルでの取組みが全国各地で行われていると思うが、筆者が気になるのは、その取組みを現場で担う各階層の人たちの、地域の将来に対する意識、もう少し具体的に言うと、地域の発展性ないし成長性にどのような認識をもって色々な取組みを発想し企画するのだろうかということである。自分

提 言

たちの地域の将来設計にあたり、ベースとなるものの考え方、物差しはこれまでと同じでよいのだろうかという疑問である。人口が増え、大きな成長が期待される社会・経済環境であれば、かつてそうしたように「ハコ」「モノ」を地域につくることが、地域の発展につながるということになるだろうが、いまはそのようなことは期待できない。出発点の座標の認識がそろってないとゴールへの到着もおぼつかないだろう。思い返せば、筆者も含め、我々の世代の多くは、バブル経済の崩壊、失われた20年の経験はあるにせよ、「成長＝拡大」という認知様式をさして疑いもせず受け入れ生きてきた。この見方から簡単には抜け出せるものではない。

前回のセミナーにおいて、西村先生が『縮小都市の挑戦』（矢作弘著、2014年）という本を紹介された。そこでは、北海道のある都市において、長年人口減少が続いているにもかかわらず「次の10年には人口増加に反転する」というような都市計画が立て続けられている例があげられ、「大きくなることはいいことだ」という成長神話からのパラダイムの転換」が求められていると記されている。この成長神話の影響は、多くの自治体や企業で普通に見受けられるように思う。しかし、それでは、「成長＝拡大」という考え方に変わるものは何か。そして「成長＝拡大」とは違う考え方の中で、我々は具体的にどのように行動すればよいのか。今回のセミナーの背景には、そのような問題意識へのアプローチ

があったが、その運営においてはゲストの識者に答えを求めるといより、むしろその手掛かりをゲストの識者と共に考える「探求型」の趣向を目指した。

「定常型社会」という考え方をご存知だろうか。筆者は、この言葉を、劇作家・評論家として著名な山崎正和氏の新聞の論説で知った（平成26年10月26日の読売新聞朝刊）。氏は、「定常型社会とは定着していない言葉だが、一言でいえば、人口と経済の成長が限界に達した社会のことであり、その事実を受け入れ、あえて生産の膨張をこれ以上は求めようとしない社会である。従来も「持続可能な成長」をめざす議論はあったが、定常型社会論はそこに高齢化と人口定常化の観点を加え、一切の成長を断念しようと訴える。」と説明している。そして氏は、「定常型社会」を提唱する本として、3冊の図書をあげていた。その一冊が今回のセミナーで講演をお願いした広井良典先生の『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』（岩波新書）であった。同書の中で、広井先生は定常型社会を「（経済）成長ということを絶対的な目標としなくとも十分な豊かさが実現されていく社会」と書いている。成長一辺倒、市場原理主義とは対極にある考え方だが、人口減少・高齢化が急速に進む地域において、定常型社会という考え方は至極常識的で受け入れやすい考え方だと思う。

今回のセミナーでは、「縮小しながら発展する地域の創生」というテーマを掲げたが、このテーマに最も相応しいと思われる広井先生に講演をお願いすることができた。このテーマ設定自体、広井先生が提唱する定常型社会という考え方に触発された面もあり、先生の講演、そして西村先生、中沢先生との討論の中で、今後の地域社会づくりに有効な考え方が展開されたのではないかと思う。

最後にセミナーのテーマタイトルとした「縮小しながら発展する地域の創生」という言葉についてふれたい。色々考えさせられる言葉である。上記に書いた「定常型社会」、また「縮小都市（社会）」などから想起してきた言葉である。

「縮小」と「発展」は普通に言えば対立するものであるが、これを対立ではなく組み合わせる一つの可能性のある方向性を示したのである。反対語の組み合わせで4つの組み合わせ（マトリックス）が見えてくる。「縮小」の反対を「拡大」、「発展」の反対を「衰退」とすると、「拡大しながら発展する」「拡大しながら衰退する」「縮小しながら発展する」「縮小しながら衰退する」の、4つの組み合わせである。

「発展」ということを従来のように、「ハコ」「モノ」的な経済的な物差しでとらえるなら、人口減少・高齢化が急速に進む地域においては「発展」ということは難しく、「縮小しながら衰退する」ということになるだろう。し

かし、「発展」の主語は、決して「ハコ」「モノ」的なハードや経済的なものだけではなく、地域住民のつながりや文化と言った精神的な豊かさであったり、既存の施設を活用し現状の課題に即してよみがえらせる新たなソフトの開発による生活インフラの質的发展もあるはずだ。「ハコ」「モノ」が縮小したからと言って、地域が衰退するものではないし、また、そうしてはならないのである。

上記に記した筆者の問題意識から言えば、今後の地域づくりは成長・拡大ではなく縮小することを与件とし、しかし衰退ではなく質的发展をしっかりと求めていく。セミナー参加者が今回のセミナーにおいて、そんなメッセージを受け止めていただけたのなら、企画したものとして望外の喜びである。

(参考文献)

- ・ 広井良典著『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』（岩波新書 2001年）
- ・ 矢作弘著『縮小都市の挑戦』（岩波新書 2014年）
- ・ 『自然と人間の協働による永続的な地域社会づくり』（平成25年度 J A 共済総研セミナー特集号）
- ・ 『2025年の日本を俯瞰した調和的な社会経済モデルを探る』（平成26年度 J A 共済総研セミナー特集号）